七艘、又は十艘來らぬ年はなかりし、此故に漸く人の住家も數そひ、町も多く成て、今の榮へとはなりしなり、〇略下

〔長崎港草三〕紅毛來長崎　黑船御禁止トナリテ、此津ノ民世渡リスベキ生業ナキコトヲ憐ミ玉ヒ、多年平戸ヘ來リシ紅毛商船、此港ニ至ラシムベキ旨、江府ヨリノ命アリテ、寛永十八年巳ノ年ヨリ、長崎ノ港ヘ入來レル事トナリヌ、元ヨリ町家ノ住居ハ猥ハシケレバ、蠻夷ノ爲ニ建置タル出島ノ空タルニ籠メ置レケル、夫ヨリ以來渡海每年絕ルコトナシ、サテ又平戸ヘ紅毛ノ來レル始ハ、慶長十三年ニテ、寛永十八年マデ凡三十餘年ノ間ナリシ、〇略下

〔本朝世事談綺雜五事〕長崎港

異國の商船、上古は筑前の博多に著、二百年以來は、周防或は豐後の府、薩摩の防津、肥前の平戸につきたり、元龜年中、肥前の長崎一ヶ所に極る也、始は深江の湊といひし也、大坂より海上凡百四十八里、

〔諸國湊附〕肥前

一同國長崎津湊、口之廣サ貳町計、沖に島有、〇略中大船何程も懸る、沖之掛り場吉、間之內、去けに不構、〇略下

〔德川禁令考六十二貿易九裁〕元和二辰年八月廿日

伊祇利須船狼藉御法度

條々

一自伊祇利須到日本商船、於平戸口賣買、他所不許之、縱雖遭風濤之難、到本邦之地、不可有異儀幷諸役免除之事、〇略中

右可相守此旨者也

平戸港